

# 千五百番歌合の古筆切

日比野浩信

## 一

およそ歌合の古筆切は、古筆切全体の割合からすると微々たるものであり、わずか二パーセント程度である。また、このうちで、いわゆる十巻本・二十巻本が占める割合は約二十パーセントに及び、中世以降に書写された歌合の断簡は、これらを除いた、全体の約一八パーセントに過ぎない。

さらに、歌仙歌合・自歌合・撰歌合などの特殊な歌合を除いた、一般的な歌合の、残存する中世書写断簡はわずかに二十程度、約五十種類でしかない。残存する歌合の古筆断簡は、ほとんどの場合、一度の歌合で一種、せいぜい二種といった中で、全くの例外と言ってよいのが六百番歌合と千五百番歌合で、ともに十種以上の断簡が確認できる。もちろん、六百番・千五百

番という絶対的な分量の多さから、その書籍が切断されれば多量の古筆切が生じ、伝存する確立が高まることも否めないが、この二歌合が、飛び抜けて広く流布し、享受されていたことも事実であろう。逆に、他の歌合のほとんどは、中世以前の書写伝本の少なさから、さほど広まってはおらず、むしろ、かろうじて散逸せずに中世を乗り越えたとさえ考えられるのかも知れない。

ここまでの詳細は全て稿を改めることとするが、本稿では、千五百番歌合の古筆切について略述する。ただし、千五百番歌合の古筆切の収集・調査が進められている旨、仄聞しており、管見に入った千五百番歌合のうち、これまでに紹介がなく、一般的には目に触れにくい個人蔵の断簡についての紹介を兼ねて、若干の検討を加える程度とし、今後の披見の便宜を図ることを主な目的としたい。よって、本文の比較については基本的に『新編国歌大観』所収本文に寄ることとし、問題のある場合には『千五百番歌合の校本とその研

究<sup>①</sup>』を参照するに留める。

千五百番歌合の古筆切については、高城功一氏が國學院大学図書館所蔵の伝慈円筆零本の紹介<sup>②</sup>の中で、一通り触れておられ、

・本能寺切（伝俊成、伝家隆、伝慈円、伝定家、伝為家の各筆）

・伝慈円筆「烏丸切」

・伝慈円筆「非本能寺切」

・伝為家筆切

・伝二条為明筆切

・伝大炊御門冬忠筆「武田切」

・伝慶運筆切

・伝二条為道筆切

・伝近衛政家筆切

・伝三浦同寸筆切

・伝甘露寺経元筆切

・伝正般筆切

・伝橋本公夏筆切

の十三種類の存在を示しておられる。

また、稿者も歌合の古筆切を紹介した中で、伝慈円筆六半切（高城氏のいう「非本能寺切」）・伝二条為明筆六半切・伝慶運筆切について扱った<sup>③</sup>ことがある。こちらにもご参照いただきたい。

## 一一

A 藤原定家筆 本能寺切

新撰古筆名葉集の後鳥羽院・家隆・慈鎮和尚・寂蓮・為家の項には、多少の表記の違いはあるものの「本能寺切 定家卿ノ部ニクハシ」のようにあって、具体的な説明はなされていないが、定家の項には「本能寺切 千五百番哥合、巻物、ウタニ行書、左右番附判詞アリ、後鳥羽院・定家卿・家隆卿・為家卿・慈鎮和尚・寂連法師各筆ナリ、又為家卿一筆アリ、同名ナリ」という説明がある。六人の筆者に共通する断簡についての記述であり、要を得ず却って解りにくい。他の名葉集類<sup>④</sup>

の定家の項には、「本能寺切」として、以下のようにある。

古筆切秘書

千五百番歌合 哥二行書 此本後鳥羽院・慈鎮・

家隆・為家各筆ナリ 判詞定家卿

古筆切名物（類葉集も「或ハ」の「ハ」の有無の違いのみ）

千五百番哥合判詞 歌ハ慈鎮或ハ家隆

古筆名葉集（文化版・文政版とも同じ）

巻物 千五百番哥合 哥二行二書 此本文後鳥羽

院・家隆卿・慈鎮・為家卿各筆也 判詞自筆

古筆切秘書では、「判詞定家卿」とし、古筆切名物

と類葉集では、書写内容を「千五百番哥合判詞」とし、

また、文化版・文政版の古筆名葉集では共に、「此本文」

として後鳥羽院以下を掲げたうえで、「判詞自筆」と

するのは、判詞を定家の自筆として見ると見るべきで

であろう。これらでは、本能寺切を、判詞は定家、歌は

慈田・家隆などと解していたようである。

この本能寺切については、久曾神昇氏が「仮説」としながらも、「本文は世尊寺伊経が清書し、判詞はそれぞれの判者の自筆」として、「千五百番歌合の原本」であるとの考えを示された<sup>5)</sup>。その後、小松茂美氏は、「本能寺切」と称される断簡を（一）（二）の二種に分類し、その（一）について、三筆に分かれる「本文の筆者は不明ながら、書写された本文清書本に判者自ら筆を執って判詞を加えた調度本で、建仁三年春における後鳥羽上皇奏上本の原本」とされ<sup>6)</sup>、田中登氏も、和歌本文は三筆、判詞は「判者自らが揮毫をしたらしい」として、「千五百番歌合の原本」とされ<sup>7)</sup>、久曾神氏の「仮説」は首肯されている。比較的多く存在が確認されているものの、入札目録などに掲載される軸装が多く、久曾神氏の言うように「諸帖に収録せられておらず」という状況で、容易に披見できるものはさほど多くはないのも確かである。これは、本文と判詞の筆跡の違いこそが見所の一つであり、そのために裁断が憚られ、一紙のまま軸装され、保存される傾向が高かったため

でもあろうか。

なお、古筆学大成では「本能寺切(一)」とは「全  
くの別種」の、筆者を為家と極めるといふ、本文と判  
詞とが同筆の千五百番歌合の巻物切が「本能寺切(二)」  
として掲出されている。これは、新撰古筆名葉集の記  
述の末尾を「又(これとは別に、本文・判詞とも)為  
家卿一筆(の断簡)アリ、「本能寺切」と)同名ナリ」  
と解して、同定し得ようか。

さて、管見に入った本能寺切は、筆者を藤原定家と  
極める一葉で、縦二八・〇センチ×横一六・三センチ、  
料紙上部から〇・八センチと三・五センチに各一本、下  
部一・〇センチに一本墨界が押されている。なお、こ  
れまでに写真などで確認できた本能寺切でも、定家判  
の部分には一様に感じられることであるが、掲出断簡  
においても、全体に停滞感があり、線の弱さを感じら  
れる。取り分け最終行の「きこえ」の三文字などは字  
形の崩れも見られ、模写の可能性もなしとしない点、  
付記しておく。ただし、模写切であっても、本能寺切

オリジナルの当該箇所が出現するまでは、当該断簡を  
本能寺切の転写本として、その本文的価値は認められ  
よう。本文は以下の七行。

虫のこゑさへかれぬらん野辺の

草はのいろもあはれあさくは

侍らねとなきからしたるといへる

あまりめつらしきことはにや侍らん

つねによみならはねとえむにおか

しきことはも侍をこれはさしも

きこえ侍らぬにや

卷十一秋四、八百一番の判詞の部分のみであるが、ま  
さに判者を定家とする自筆部分。ただ、諸本に存する  
判詞の末尾、

鹿のねだにのこらざらんふるさとのこはぎ、げに

露けくや侍らん

の一文は、元来の欠脱か、改行・裁断によるものかは

判然としない。

この一葉には、注意すべき異同はなく、三行目「侍らねと」が新編国歌大観本では「侍らねども」とあり、「も」の有無の違いのみである。ただし、有吉保氏は、久曾神氏が掲出された十一葉の本能寺切と諸本を比較、「伝存の諸本のいずれとも一致しない部分（本能寺切固有の）がある」として、独自異文の存在を指摘しておられる。その後も確認できる本能寺切は増加している。改めての収集・整理、検討が試みられるべきであろう。

#### B 伝慈円筆 六半切

慈円を伝称筆者とする千五百番歌合切が、本能寺以外にも伝存しており、新撰古筆名葉集の慈鎮和尚の項に「同（六半） 千五百番哥合」とあり、古筆切秘書にも「六半本 千五百番歌合 十二行 長四寸四分ほど」との記載がある。これに該当すると思われるのが、ここに掲出する伝慈円筆六半切である。もとは六半形

の冊子本で、一面十二行書。もとより慈円の真筆ではなく、書写年代については、南北朝時代とする見解もあるが、鎌倉中期頃にまでは遡るように思われ、千五百番歌合の伝本としては、原本と目される本能寺切を除けば、最古写本の断簡として重視される。ちなみに当該断簡について高城氏は「非本能寺切」という名称を用いておられるが、伝慈円筆本能寺切と区別する名称としては、名葉集の記述に基づいて「六半切」を用いるのがよからう。ツレの断簡は高城氏が五十七丁を有する巻十七の零本と、十四面分の存在を示されたが、それ以降にも、『古筆の楽しみ』<sup>(9)</sup>『歌びと達の競演』にそれぞれ一葉ずつ報告がある。

さて、新たに管見に触れたのは二葉。①は縦一五・四センチ×横一四・〇センチで巻三春三、二百二十三番から二百二十四番にかけての部分、②は縦一五・一センチ×横一三・五センチで巻十八恋三、千三百二十三番の判詞の部分。これまでに当該伝慈円筆六半切の字高については触れられていないようなの

で記しておく、和歌一四センチ内外、詞書は約  
一二・七センチ程度。本文は以下の通り。

②

のいもせのならひのありやうをよめる  
哥にて古今恋の哥のはてにはいりて  
侍とみゆるをおかしくとりなされても侍

かな本哥よしの、河のよしや世中と

侍いまの哥はわかなみたをよみそへてよしの、川のよしさらはといひ。本哥にはなかれてはいも

せの山の中になつるをいまの詠にいもせの侍ゆ、しき

山の中になかれよとなされて  
心たくみなり木にかた斧きさまは

野匠か斧もおよふへからす紙に糸をか、

れんには長康か筆もならひかた

かるへし右哥はたなはたを我身に

なしてかさねぬ袖にあまの河浪を

かけられたる風情た、人のたま

①

ちらてそにほふはるのやま風

左花になれゆくみよしの、山心姿■しく

侍を右哥久方のとをきちらてそに■ふと

いへる心日賦堯年舜よの昔周武漢文之時の

春の嵐にやと覚侍れはおかしとて以右為勝

二百廿四番

左 具親

あとたえてなかめしゆきの庭までは

たのみし物をはなのさかりを

右 雅経

わすれすはちりなんのちも思いてよ

はなみかてらのはるの夜の月

特に②の断簡では行間への書き入れが多く見られる  
ため、本文の特質をとらえやすいかとも見えたが、校  
本を参照しても、この書き入れが欠脱する伝本の存在  
は示されておらず、おそらくは二箇所にわたる一行分

の書写の際の誤脱に気付いて補ったものに過ぎまい。新編国歌大観本との異同を、断簡↓新編国歌大観本のように示すと、

①二行目「左」↓「左歌」、三行目「右哥」↓「右」、四行目「舜<sup>日歌</sup>よの」↓「舜日の」、五行目「嵐」↓「山風」、同「おかしとて」↓「おかし」

②二行目「古今恋の哥」↓「古今の恋歌」、四行目「本哥」↓「本歌は」、五行目「侍」↓「侍るに」、八行目「野匠か<sup>斧</sup>も」↓「野匠が斧も」、十一行目「河浪」↓「河」、十二行目「た、人の」↓「ただの人の」  
のようなものであり、大きく問題とすべき異同は、この二葉には見出すことはできない。

現存伝本に比べて格段に書写年代の古い本文であり、何より、零本の出現により、かなり多くの分量が残存しているのは貴重である。今後は、その零本をも活用した詳細な検討が行われることを期待したい。

#### C 筆者未詳 四半切

従来、未紹介の鎌倉期書写断簡が管見に入った。極め札などはなく、筆者は未詳。縦二〇・七センチ×横九・九センチ。和歌の字高は二〇・三センチ内外。料紙の上下は裁断されているようで、ほとんど余白が無い。両面に書写されており、料紙の端に綴じ目もあり、もとは四半形の冊子本。現状では、表裏共に各五行の残存で、卷二十雑二、千四百三十六番から千四百三十七番にかけての部分。本文は後に掲出するが、表裏の間には「ふるきなみにはたちまさるべし、以左為勝」という判詞の後半と、「千四百三十七番 左 保季朝臣」という番付けから作者名にかけてが欠落している。表面の千四百三十六番の判詞の残りが一行で書かれているが、二行に渡っていたかは定かではないが、裏面は和歌から書かれており、その前に番付け一行と、左右付けと作者名の一行、少なくとも二行があったはずである。料紙を透かして見ると、表裏の行詰めはびたりと重なっており、表裏合わせて三行分の欠落というこ

とはあり得ず、二行ずつ合わせて四行が裁断されて欠落していることが判るわけである。すると、元来は一面七行で、横幅もあと四センチ程度大きかったようので、概ね一四センチ強といったところであろうか。一見、窮屈な印象もあるが、一字一字は大振りで伸びやかな筆致で、書写年代は鎌倉時代の中期から後期頃とみてよからう。本能寺切、伝慈円筆六半切に継いで、書写年代の古い断簡が出現したことになる。さて、本文は以下の通り。

表

しもにかれゆく、さはもらすな

右

三宮

わたのはらやえのしほちをみわたせは

雲につらなるおきつしらなみ

はるのあめにうるをひにける草なれば

裏

みやこおもふそなたの風を身にしめて  
月にともなふうつの山こゑ

右

内大臣

おひの、ちつきにすみけむからひとの  
あとをたつねてくるやまちな

新編国歌大観所収本とほぼ一致し、仮名遣い以外の違いとしては、わずかに一箇所、裏面五行目「くる」が新編国歌大観では「いる」としている程度である。ただし、校本に拠れば、ここを「くる」とする伝本は他にはなく、これは断簡の独自異文ということになる。現存伝本と比べて古い書写年代であるのみならず、鎌倉期における千五百番歌合の流布や享受の状況を推察する手掛かりと考えるべきであり、広く流布し、享受されていたことを改めて裏付けることとなった。惜しむらくは伝称筆者が特定できていない点である。書写年代も古く、独自異文を有するのみならず、書として



も他の鎌倉期の書写断簡と比べても見劣りしない好ましい筆致でもある。伝称筆者が特定されれば、今後の博搜の拠り所ともなる。ツレの出現が殊に望まれる。

#### D 伝慶運筆 卷物切

伝慶運筆卷物切は、新撰古筆名葉集の慶運法師の項に「同（卷物切） 千五百番哥合 砂子昏 哥一行書」とあり、古筆家秘書には「同（卷物） 九寸一分 哥二行書 砂子 千五百番」、古筆切目安と類葉集・古筆切名物には「歌合切 千五百番 一首一行書 砂子入」、文政版の古筆名葉集にも「哥合切 紙砂子入 哥一行書」のように、いずれの名葉集の類にも記載のある名物切である。慶運の真筆とは認められないが、書写年代は鎌倉末期から南北朝期頃と思われる。ツレも比較的多く、古筆学大成所収の十三葉をはじめ、二十葉ほどが知られている。稿者も『歌びと達の競演』で二葉を報告した。現在確認できる範囲では、卷十八恋三以降の断簡に限られているようである。名葉集類

の記述にもあるように金銀砂子、小箔、野毛で霞引きした美麗な装飾料紙もあるが、素紙の部分もある。なお、その装飾は、所によつては文字を避けているように見られる場合もあり、あるいは後に施された可能性も考えられる。いずれも料紙の上下が詰まっており、中には文字の下部が切れている場合さえあり、裁断の形跡はあるものの、現在、寸法の記されたものの中で最大でも二七・六センチの料紙が確認できる程度である。これほどまでに上下を詰めて書写することは常識的には考えられず、仮にそれぞれ一センチほどの余白があったと仮定すれば、もとは三〇センチほどの大きさであったことになる。

ところで、この伝慶運筆切は、おそらくその大きさから従来「卷物切」とされていたが、高城氏は「断簡紙面の表面に鏡文字（反転文字）で本紙と同筆らしきものが部分的にみられる」として、冊子本の断簡であるとされた。なるほど、図版で紹介されている断簡の中にも、裏写りの文字のような痕跡が見受けられる断

簡がある。これが裏写りした文字であれば、冊子本であつたことに間違いあるまい。

文字の写り込み以外にも、あるいは冊子本かとも思わせる要因は、無いわけではない。例えば、擦り消しの可能性もあるため軽々に断ぜられないが、古筆学大成所収切のうち99図・100図のように、料紙の左端の余白が広いものがある。また、97図は、やはり図版では明瞭ではないが、卷子本の紙継ぎとしては継ぎ目が荒れて見える。さらに、『続古筆の楽しみ』所収切は、料紙中途に継ぎ目があり、本文が一行分欠落の上、行頭がやや上下にずれており、料紙の汚損具合も異なっている。これは、元来の卷子装の紙継ぎではあるまい。

さらに、先述のように、卷十八から卷二十に渡る料紙の上下、特に下部に裁断があることから、一冊（一本）当たりの書写分量は不明ながら、現存状況から少なくとも卷十八から卷二十は一纏まりだったようである。このある程度の纏まった分量が一時に裁断された

点からは、冊子本の状態での、綴じ直しなどに際しての化粧裁ちなどによるものと考えるのが、不自然ではないように思われる。

ただ、管見に入った最多の行数は『歌びと達の競演』所収の二葉（九二・九三）で十行、横幅の最大値は一六・一センチ。これを一面分とすると、かなり縦長の冊子本ということになる。また、これを一面分と認めたとしても、これまでに約二十葉もの残存が報告されていながら、一面完存する断簡は二葉しか見つかっていないことになる。加えて、一葉の中に番をまたいで書写されている断簡が見出されていない点も、気になるところである。

また、写り込んだ「本紙と同筆らしき」文字が不鮮明で、表面に対応した内容であるか否かが確認できていない。現時点では、断定を躊躇する所以である。

従来巻物切とされながらも、実は高さ三〇センチほどもある大型の冊子本だった伝為家筆・伝為氏筆源氏物語切のような例も無いわけではないが、これは綴じ

目の痕跡が確認されたために、冊子本であると認定できる。さらに、後掲の伝後小松院筆切のように、それなりに大型の冊子本もあるが、これも、両面書写の残簡である。ともに、冊子本たる明確な証左が残っているのである。当該伝慶運筆切も、裏写りの文字が表面に対応していると読解できる断簡や両面書写の断簡、綴じ目のある断簡、あるいは残欠本などが見出されて冊子本であること、また反対に、継ぎ目に文字の乗った部分や残巻の出現など、卷子本であることが確認できるまでは、冊子本である可能性は認めながら、混乱を招かぬ為にも、従来通り「巻物切」として掲出しておくこととする。

さて、新たに管見に入った一葉は、縦二七・七センチ×横一五・〇センチで、縦の寸法が現在確認できる最大値ということになる。やはり巻十八の断簡で、千三百二十二番の歌と判詞の部分。料紙は金銀装飾の無い素紙である。本文は以下の九行。

千三百廿二番

左 左大臣

われとこそなかめなれにし山のはにそれもかたみのありあけの月

右 家長

みせはやなあか月露のをきわかれさゝわくるあさの袖のけしきを

左 哥上句の我とこそなかめなれにし山のはにと

侍よりうけ給はる心もすみたちてはへるに下句のそ

れもかたみのありあけの月と侍たゝひとこととはに

恋の心のふかさもあらはれ侍こそたけく心あまれりなど

九行目「あらはれ侍こそたけく心あまれり」の部分  
が、新編国歌大観本では「あらはれ侍りぬるにこそた  
けたかく心あまれり」のようにあり、異同が認められる。

校本を参照するに、「侍こそ」の部分で「侍ぬるこそ」  
「侍りぬるにこそ」、あるいは「侍」がなく「あらはれ  
ぬるにこそ」とする伝本はあり、「たけく」について  
も「たけたかく」「けたかく」とする伝本はあるが、  
当該断簡と同一の本文を持つ伝本は確認できず、当該  
断簡の独自異文ということになる。掲出断簡には無い  
が、他の断簡には異文注記とみられる傍書が存する箇  
所もある。比較的書写年代が古いこと、巻十八以降に  
集中して二十葉程が確認できることから、その本文  
をまとめて比較検討する必要がある。また、卷子本  
であれ冊子本であれ、立派な体裁の書写本であること  
からは、この千五百番歌合の享受的意義をも合わせ考  
慮すべきであるが、書誌的に決定的ではない部分も残  
る。問題解明のためにも、より多くのツレの出現が望  
まれる。

#### E 伝後小松院筆 四半切

版本系の古筆名葉集では後小松院は立項さへされて  
いないが、写本系の名葉集には取り上げられており、  
古筆切秘書では後小松院の項に「歌合切 八寸八分」  
という記述があり、古筆切目安には「同(式紙形)  
歌合切 判詞アリ」とあり、古筆切名物では「同(式  
紙) 歌合判之詞アリ 長八寸八分」、類葉集でも「同  
(式紙) 歌合 判ノ詞アリ 長八寸八分」とある。後  
小松院を筆者と極める歌合の古筆切としては、陽明文  
庫の国宝大手鑑や『国文学古筆切入門』<sup>(12)</sup>などに、御裳  
濯川歌合を書写内容とする断簡がある。名葉集類にい  
う「式紙(色紙)」ではなく、素紙のものもあるが金  
銀泥で下絵のある料紙に、大振りに書写された文字は  
後小松院の真跡と考えられており、名物に相応しい。  
また、縦二六・〇センチから二六・六センチの大きさで、  
「八寸八分」にも適合する。よって、名葉集類の記載  
には、この御裳濯川歌合切が該当しよう。美麗な料紙  
にゆつたりと書かれた、殊に左右の和歌本文を備えた

箇所などは、「色紙」のような印象を与えたのではないだろうか。

さて、従来報告の無かった、後小松院を筆者と極める千五百番歌合切が二葉、管見に入った。後小松院の筆跡ではなさそうであるが、書写年代は南北朝期頃であろう。料紙が薄手なこともあり、表裏が剥がされずに残っており、両面に書写されていることから、もとは大振りの四半形の冊子本であったことが判る。

一葉(①)は縦二五・八センチ×横五・五センチ。字高は歌が二五センチ内外、判詞が二三・五センチ内外。卷十五祝の部分で、表面は千五十四番判詞から千五十五番の歌にかけて、裏面は千五十八番の歌から判詞にかけて。表面と裏面との間には、かなりの本文の隔たりがある。表面の左端に作者名「家長」の一部が欠けて見えており、また、裏面の左端にも次の番付け「千五十九番」の一部が見えていることで、元の冊子の状態では、表面には右側、ノドの部分にも、少なくとももう一行あったことが判る。

いま一葉(②)は縦二六・〇センチ×横六・八センチ。同じく卷十五祝の部で、表面は千七十八番判詞から千七十九番の歌、裏面は千七十九番判詞から千八十番の番付けまで。表面の左端には、続く右方の左右付けの「右」と、作者名「定家朝臣」の文字が一部分残存しているのが判る。裏面の右端にも文字の残存が認められ、千七十九番「右 定家朝臣」の歌、

さねこじのさかきにかけしかがみにぞ君がときは  
のかげは見えけん

の残欠文字であろうことは容易に推測できる。つまり、表面と裏面との間には、右方の左右付けと作者名、和歌一首が欠けていることになる。さて、それぞれの本文は以下の通り。

①表

ふこゑなと侍これもこゝろ詞かなひて宜侍り  
仍持と申へし

千十五番<sup>五</sup>

左 公経卿

君か世をわかつそまにいのりきてひ原すき原い  
ろもかはらし

①裏

あまつそら霞をわけていつるひのかけものときき

千世のはつは ■

左いせの海きよきなきさの波も君に心をよす

とはかりに ■

祝の心こそおほつかなく侍れ右のうたはおほ

かたもよろしく

侍うへに祝の心侍れは可為勝

②表

左の末句と、こほりて侍右やそせの波をへた  
てゝもなと侍(は)

いますこしなひやかにきこえ侍か祝の心のか  
すかに侍にや仍可為(持)

千七十九番

左 具親

い ■ 代も君かためしやこれならむいつぬき河の  
つるのけころも

②裏

左哥詞そすこしと、こほりて侍れとも昔天照

大神あまのい(はと)

■とちさせ給へり。しとき世中とこやみになりて

侍しに神たちかこ

山のまさかきねこしてひらにきてあをにきて

か、みなどかけて

神楽をしたまひけることをいま祝にひきよせ

てをかしく

よまれて侍かな左つねの風情なり無左右右勝  
にこそ侍めれ

断簡↓新編国歌大観本のように異同を掲げると、

①表四行目「いのりきて」↓「いのりおきて」、裏  
二行目「左」↓「左歌」、三行目「右のうた」↓「右歌」  
②表「左の」↓「左」、裏一行目「左哥」↓「右歌」、  
同「侍れ」↓「きこえ侍れ」、三行目「ひらにきて」  
↓「しらにきて」、五行目「無左右」↓「左右なき」、  
同「右勝」↓「右のかち」

ほとんどが助詞の有無や表記の違い程度であり、校  
本を参照するに、概ね現存本にも一致する異同が見受  
けられる。一箇所、②裏三行目の「ひらにきて」は、  
断簡の独自異文であるが、これは古事記にいう「白和  
弊」であり、「しらにきて」が正しいのであり、「白  
を「ひら」と読ませてしまっている断簡の誤りである。  
総じて、今回確認できた二葉四面からは、全体的に注

意すべき程の異同は見られないといってよからう。  
ところで、これら二葉の残存状況を基に復元したの  
が、次頁の書面推測図である。

現状は縦約二六センチであるが、上下の文字が詰  
まっており、中には下部の文字が切れている箇所もあ  
り、それぞれ一センチ程の余白があったとして二八セ  
ンチ、卷子本並の大きさである。新編国歌大観所収本  
文を参照に中途欠落した本文を補うと、一面十六行に  
なる。横幅も、四行で五・五センチを単純に四倍して  
も二十二センチ、余白を考慮すれば二十三〜二十四セ  
ンチほどもある大型の冊子本であったことが推測され  
る。判詞の字詰めと改行によっては多少の増減はある  
かも知れないが、これ以上減らして考える必要は無か  
ろう。仮に、横幅が増加すれば、もっと大きかったこ  
とになる。現代のA四サイズよりも幅が二〜三センチ  
広い冊子本を想像すれば解りやすい。本の大きさは本  
の格であり、書写内容の尊重を意味すると言ってもよ  
からう。詰まらぬ内容に、立派な体裁はそぐわない。

<p>千五十五番 左 公経 君か世をわかつそまにいのりきてひ原すき原いろもかはらし 右 (家長) はるごとにはこやの山にさき草のよろづ代かけてとのづくりせり 左 わがたつそまぞいかにぞやきこえはべれども歌がらはよろしく侍り 右 いひしりていますこし宜しく侍るにや 千五十六番 左 季能卿 君が代はながとのしまのこまつばらかみさびてまた若葉さすまで 右 三宮 さざれ石のいはほとならんゆくすゑをちたび見るべき君とこそきけ 左 きみがよは長門の島などはべる万葉集古風を存せられた 右 さきにも申し侍る様にこれもふるき歌の心をおもはれて</p>	<p>千五十七番 左 宮内卿 おほかたも同様程にぞ見たまふる 右 内大臣 のどかなるみよのはじめのはるの日をかすみにかはる空かとや見ん 君が代はみもすそ河にすむ月のそこの心は神ぞしるらん 左 右 共に宜しく侍り、いづれと難 弁こそ 千五十八番 左 讃岐 いせのうみきよきなきさのなみもただ君に心をよするなりけり 右 忠良卿 あまつそら霞をわけていつるひのかげものときき千世はのはつはる 左 いせの海きよきなきさの波も君に心をよすとはかりに(ては) 祝の心こそおほつかなく侍れ右のうたはおほかたもよろしく 侍うへに祝の心侍は可為勝 (千五十九番)</p>
16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

断簡の種類が多さ、本の格式の高さなどは、この千五百番歌合がいかにも尊重されていたかを示していると考えて良からう。

ともあれ、南北朝頃に書写された、従来紹介のなかった千五百番歌合切が出現したわけであり、中世における千五百番歌合の重要度と流布の広さが改めて裏付けられたことにならう。

F 伝近衛政家筆 四半切

近衛政家という人物は、版本で刊行された古筆名葉の類には何ら記されるところはないが、写本系の古筆家秘書・古筆切目安・古筆切名物・類葉集では立項されておられ、一部では古筆切の筆者としても知られていたことが判る。ただそこに、千五百番歌合切についての記述は無い。管見に入ったのは、縦二〇・五センチ×横一〇・四センチで、もとは四半形の冊子本。字高は和歌約一九センチ、判詞は一六・五センチ内外。ツレは石川県立美術館蔵手鑑所収切と高城氏蔵切の二葉



がある。新出断簡は七行で、三行目と四行目の間で裁断された料紙が継がれている。一見、内容的に丁をまたぐ二葉を継いで一面分に仕立てたかのように見られなくもないが、左側の料紙の「ぬ」「や」の文字が右側の料紙に掛かって繋がっており、元々同一面であったものが、何らかの都合（歌と判詞とで分断しようとしたか）で切断され、再び継がれたようである。ツレに徴するに、もとは一面八行であり、一行分が切り取られているようである。政家の書名入り短冊とは別筆のようであり、その真筆とは認められないが、書写年代は室町中期頃であろう。本文は次の通り。

右 通具朝臣

せりつみしみかきかはらはそれなから  
むかしをよそにぬらす袖かな

左哥詞つゝかぬやうに  
きこえ侍れと右昔をよそに  
ぬらす袖かなと侍もさにこそ

千五百番歌合の古筆切

とはきこ■なからおほつかなく

四行目「左哥詞」を新編国歌大観所収本では「左哥」とする程度の異同である。

新出断簡は卷一春一の五十三番の部分であるが、石川県立美術館蔵手鑑所収切は卷二春二の七十七番、高城氏蔵切は卷十六恋一の千百九十一番から千百九十二番にかけてであり、広い範囲で残存していたものようである。今後も出現の可能性は高からう。

G 伝橋本公夏筆 四半切

橋本公夏は、版本系統の古筆名葉集には立項さえされていなが、写本で伝わる名葉集のうち、古筆切目安・古筆切名物・類葉集には記載されており、先掲の近衛政家同様、やはり古筆の筆者としては無名というわけではなく、伊勢物語切や源氏物語切、古今集切や拾遺集切などが知られている。その公夏を筆者と極める千五百番歌合切が管見に入った。縦二五・八センチ

×横一二・五センチで、もとは四半形の冊子本と思われ、縦横の比率から、二〜三行分ほどの切り取りがあったようである。字高は和歌二十二・五センチ内外、判詞も、二字ほど下げて書かれるものの、和歌の行末と判詞の行末が、それぞれに揃えられているのは、書写上の特色といえようか。掲出断簡は、高城氏が既に紹介された一葉であるが、他にツレは報告されておらず、所蔵者が代わったこともあり、改めてここに取り上げることにした。公夏の署名入り短冊などと比べると、同筆とは言えず、公夏の真筆ではなさそうである。書写年代は室町中期頃とみてよからう。本文は次の八行。

千三百廿一番

左

女房

しら露も朝行ほとそ野へにをく時ともわかぬ袖のうへ  
かな

右

寂蓮

さゆる夜のうきねの霜をうちはらひなくなるをしも我

はかりかはヤイ

左歌は万葉集に日くらしは時となけ共我こふるた  
をやめわれは

さためかねつもと侍るに此上の句には白露も朝行  
程そ野へにをく

とよまれて下に時ともわかぬ袖の上哉と侍る既に  
万葉ノ一言一篇

卷十八恋三、千三百二十一番の部分で、異同を断簡↓  
新編国歌大観所収本の順に掲げると、六行目「万葉集」  
↓「万葉」・七行目「上句」↓「上の句」・同「朝行」  
↓「あけ行く」といった違いがある。「万葉集」を「万  
葉」する違いは他の伝本にもあり、「上句」を「上の句」  
のとするのは、問題とはなるまい。ただ、校本に拠れ  
ば「あ(明)け行く」を「朝行」とする伝本は他には  
掲出されておらず、断簡の独自異文ということになる  
が、既紹介の断簡でもあり、異同の指摘に留めておく。

日 伝飛鳥井雅俊筆 四半切

飛鳥井雅俊については、名葉集の類には何ら記すところはなく、古筆切の筆者としてはさほど注意されていなかったようである。ただ、全くの無名というわけでもなく、この雅俊を筆者と伝える断簡として、古今集切や定家八代抄切などがある。ただし、千五百番歌合切は、従来紹介されてこなかった新出の断簡である。署名入りの短冊と比べると、雅俊の真筆ではなさそうであるが、書写年代は室町中期頃とってよからう。縦二四・四センチ×横一五・五センチで、もとは四半形の冊子本。一面に九行が書写されている。字高は和歌一九・五センチ、判詞一七・五センチ内外で、行頭・行末を整然と揃えて几帳面に書写された印象がある。ツレの断簡には瞩目していない。本文は以下の通り。

さひしさは虫上のせとのしほ風に夜ふかき月  
にしく物そなき

七百二十四番

千五百番歌合の古筆切

左 公継卿

浪のうつたまの浦わのあら磯にひかりをくたく夜  
半の月かな

右 勝 俊成卿女

月をのみ伏見の里の秋の暮松風ならてとふ人もな  
し

槿の戸は月にまふかせてよや明す桐のはつたひ  
かせは吹つゝ

七百二十五番

左 勝 公経卿

断簡七行目「槿の戸は」が新編国歌大観所収本では「ま  
きのはは」としているが、校本に拠ればこれは、むし  
ろ新編国歌大観の底本である高松宮本の独自異文であ  
り、他の諸本は断簡同様「戸」とする。他には特に注  
意すべき異同はなさそうである。

室町時代にも千五百番歌合は広く流布していたと思  
しく、伝本も複数残り、古筆切などはまだまだ新たに

見出される可能性を残している。

本文は以下の通り。

I 伝富小路氏直筆 六半切

富小路氏直は資直の息で、生没年は詳らかではないが、弘治三年（二五五七）に五十九歳で出家している。

掲出は、その氏直を筆者と極める千五百番歌合の断簡

で、これまでに高城氏所蔵の卷十六恋一の一葉が報告されているのみ。縦二二・〇センチ×横一三・八センチ

で、もとは一面八行の四半形の冊子本。字高は和歌

一九センチ内外、判詞一七・五センチ内外。番付け・

左右付け・作者名を一行に記されているのが書写上の

特色といえよう。書写年代は室町の中・後期頃である

う。氏直の署名入りの詠草と比べると、類似した文字

は見受けられるようであるが、同筆と断ずるには至っ

ていない。それでも、このような古筆切の筆者として

は無名と言うべき人物の筆跡として極められていると

ころからは、奥書など何らかの根拠があったのかも知

れず、氏直の真筆の可能性も無しとはしない。さて、

千百五十九番 左 公継卿

つれなさをかねてしらはやあま雲の

よそにみるより袖のぬれぬる

右 尺阿

色に出す人の袖には露かくる

きみはうけし（ママ）の花にやあるらん

左つれなさをかねて知はやあま

雲のなとをけるほとをかしく

ツレと同じく卷十六恋一の部分。異同は、六行目「う

けしの」が新編国歌大観所収本では「うけらの」とあ

る程度である。ただ、校本によれば、その底本の宮内

庁書陵部蔵本では「うは葉（ん）の」、他には異本注記とし

て「うら葉の」とするものや、「うけらの」「うけらか

とするものがあるが、「うけしの」とする伝本は見当

たらぬ。すると、これは断簡の独自異文ということ

になるが、まず、「裏葉の花」「上葉の花」などという花は例が無いようであり、「うけらの花」あるいは「うけらが花」は万葉集以来多くの用例がある。「うけしの花」の用例にも瞩目していない。助詞の「の」「が」の違いもあるが、意味的には同じであり、「うけら」が正しく、「うけし」は誤写と考えてよさそうであり、異文としては特に注意する必要はなからう。それでも、誤写の過程を推測するに「うけら」の「ら」を「し」に誤ったことは明白で、「うけら」とする本文を持つ伝本からの派生であることは推察されよう。ツレの本文の異同からも同一の傾向を見て取れるが、ここでは触れるに留めることとする。

#### J 伝甘露寺経元筆 六半切

甘露寺経元は名葉集の類にはその名は見えない。しかし、この経元を筆者と極める和漢朗詠集切が伝わっている。また、千五百番歌合の卷十六恋一（千百三十七番）を書写内容とする断簡も石川県美術館蔵手鑑に一

葉ある。これは古筆手鑑大成<sup>13</sup>に拠ると、縦二三・二センチ×横一五・九センチで八行が書写されており、もとは四半形の冊子本であり、四半切と称すべきものであろう。

この甘露寺経元を筆者と極める千五百番歌合切が新たに管見に入った。縦一四・三センチ×横一〇・六センチ、字高は和歌が約一二センチ、判詞が約一一センチ。六行が書写されている。小四半形であったともみられなくもないが、おそらく六半形で、余白の詰まりから、料紙右側が裁断されているようであり、もう二行ほどあったのであろう。同一の筆者に極められるだけあって、筆跡も四半切と極めて類似しているが、特に新出六半切は、字高の低い一行に詰めて書写することもあって、文字が小さく字間が窮屈で判読しづらいところさえある。比較できる文字が思いのほか少ないこともあり、両者が同筆か否かの判断は差し控えておきたい。また、共に経元の署名入りの短冊と比較するに、類似するものの、自ずと書き振りが異なり、四半切、

六半切とも経元の真筆と断ずるには至っていない。

字形の類似の他、行末を揃えるために一行書の和歌の数字文字を下草書き風にする書式のような共通点も見受けられるが、ともあれ石川県美術館蔵手鑑所収四半切と新出六半切とは、全くの別種の断簡であり、これまでに報告のない新種の断簡の出現ということになる。さて、本文は以下の六行。

神かせやみもすそ川も石清水も君かためとやすみ  
はしめけん

かけまくもかしこき神かもろしめは何にもい  
か、引くらふへき

千三百六十三番

左 持 良平

いかなれはおなし空よりふる雨の春秋のへの色を  
かふらん

右 雅経

断簡↓新編国歌大観所収本のように異同を示すと、一行目「石清水も」↓「いはしみづ」、二行目「神か」↓「神の」、同「引くらふ」↓「ひきならふ」の三箇所異同が認められる。校本に拠れば、校合本の中では「久曾神本a」一本のみ、この三箇所が断簡と悉く一致し、その近似性を思わせる。ちなみに、石川県美術館蔵手鑑所収四半切は、独自異文なども多く、本文の傾向は全く異なる。先に、両者が同筆か否かについて触れ、断定を避けたが、同一人物が同一作品の別伝本を、それぞれ書式を変えて書写したと考えるより、別人による書写と考える方が自然であろう。いずれもわずか断簡一葉分の本文による比較に過ぎない。ツレの出現を俟って、改めて検討すべきであることは、他の断簡も同様である。

K 筆者未詳 医書紙背 四半切

筆者未詳の一葉についても掲出しておく。縦二六・六×横八・三センチ。もとは四半形の冊子本。和

歌の字高は約二三センチ。書写年代は室町前期頃であろうか。料紙右側にやや広めの余白、左端にわずかながら文字の残欠らしき墨跡があり、現状では五行が残存しているが、本来は少なくともこの倍の十行以上が存していたと思われる。本文は以下の通り。

千二百十七番

左

左大臣

木かくれて身はうつせみのから衣ころもへにけり

しのひくくに

右

丹後

■ ■ なしや露のよすかを尋ねきて物思ふ袖にや

とる月かけ

新編国歌大観所収本文と比べて、異同はない。

さほど書写年代が遡るわけでもなく、本文にも特色があるわけではないが、実は、裏面には別内容が書写されており、その特殊な現存状況について触れておく。

千五百番歌合を書写した面の紙背に、医書のような内容が五行が記されている（読み慣れぬ内容であり、解読に不安がある。後掲の図版を参照願いたい）。

一疵ノウズキヲやむる薬事 おもたかの根南天 (生?)

等分ニ合粉にしておさあひもの、ちにて疵口ニ

付へし

又は あせほの事か かんしやうの木を霜にして (被成候?) 湯ニテ

なり共

用へし又牛のほねノ霜ねこのかしら牛のかしら

疵口の疼きを癒す薬の事であるらしい。朱で鉤点や句読点を記す。字高は二一センチ程度で、上部に四センチ近い空白がある。右端に、文字の残欠があり、また、余白から、右側が裁断された左端の四行分であろう。このことは反対面の千五百番歌合側とも対応している。三方の角（一方は破損）に、手鑑などに貼付されていたのであろう、雲母の痕跡がある。また、千五百

番歌合を書写する面の方が料紙の焼けが進んでいることから、手鑑への貼付以前には屏風などに貼り交ぜられていたのかもしれない。

保存時はともかくも、書写当時はどちらが表面、どちらが後から紙背として利用されたのかは明白ではない。書写年代は共に室町前期頃までは遡り得るようで、双方にさほど隔たりはないように思われる。ただ、歌合面は上部の余白がわずかに一センチほど、医書面は四センチ弱あり、上部に空きのある医書を用いて、余裕のない書き振りで歌合を書写したと考えるよりは、歌合の裏面に、上部に余裕をもって医書を写したとみる方が合理的ではあるまいか。また、実用書の裏面を利用して歌合を書写するのも不自然であろう。さらに、医書がいかなる書名の書物であるかは調べ得ておらず、その分量は不分明ながら、千五百番歌合という大部な歌合を書写するのに、恐らくはこれよりは少ないであろう分量の医書などの紙背を集めて用いるより、比較的大量に存した歌合紙背を利用して医書を書写し

たと考えるのが自然ではあるまいか。これらのことから、千五百番歌合の紙背を用いて医書が書写されたものとみておきたい。

千五百番歌合という文芸史上名高い歌合が反古とされ、紙背として利用されるに至ったことは、国文学サイドからは残念な事ではあるが、致し方あるまい。端本になったり、破損したりしたために再利用されたのかも知れない。ただ、裁断され、古筆切となってからは、やはり医書などよりも歌切が尊重されたことは認められよう。ツレの博搜の目安の一つともなるう。伝来の一形態としても、注意すべきである。

### 三

以上、管見に入った千五百番歌合の古筆切について略述した。

A 伝藤原定家筆 本能寺切

B 伝慈円筆 六半切



C 筆者未詳 四半切（新種）

D 伝慶運筆 巻物切

E 伝後小松院筆 四半切（新種）

F 伝近衛政家筆 四半切

G 伝橋本公夏筆 四半切

H 伝飛鳥井雅俊 四半切（新種）

I 伝富小路氏直筆 四半切

J 伝甘露寺経元筆 六半切（新種）

K 筆者未詳 医書紙背 四半切（新種）

の、十一種都合十六葉分を報告し得たのであるが、うち五種がこれまでに報告の無かった新種の断簡である。高城氏が掲出されたものと合わせ、十八種が知られることとなった。千五百番歌合の古筆切の種類の多さは、他の歌合に比べると群を抜いており、いかに広く流布し、享受されたかが示唆されているといえよう。ただし、高城氏掲出の伝慈円筆「烏丸切」のように所在の詳らかではないもの<sup>(14)</sup>もあり、今後確認・検討の必要がある。

また、鎌倉期、南北朝期、室町期における書写断簡の存在は、ある特定の時期だけではなく、中世全般を通じてこの千五百番歌合がいに広く流布し、享受されてきたかを示し得ている。

さらに、他の歌合に比べて伝本に恵まれているとはいえ、やはり中世書写伝本は少数であり、中世書写断簡の存在は看過できまい。本稿ではそこまでの言及はしなかったが、やはり本文の精査は必要であり、現存本との比較による、書写年代の古い書写断簡の本文の特異性と共通点、時代による本文の変遷や各時代における本文系統の勢力分布など、現存伝本からは知ることのできない情報を有する重要資料として、調査・検討の対象とすべきであろう。

（注）

（1）有吉保氏『千五百番歌合の校本とその研究』（昭和四十三年四月 風間書房）

（2）高城氏「伝慈円筆『千五百番歌合』零本と断簡―國學院

大學図書館蔵貴重本を中心として―」（國學院大學図書館紀要）10 平成十二年三月）。以下、高城氏の説はこれに

寺切千五百番歌合」（『汲古』19 平成三年六月）では、二十四葉を掲出しての言及がある。

拠る。また。同様の報告が高城氏・小林強氏「古筆切研究第一集」（平成十二年四月 月思文閣出版）にもある。高城氏

（6）小松茂美氏『古筆学大成』22解説（平成四年六月 講談社）

の掲出は「小林強氏のご教示による」とされているが、総じて小林氏の古筆切一覧は極めて詳細で、古書店目録掲載

（7）田中登氏『平成新修古筆資料集 第三集』（平成十八年一月 思文閣出版）

の断簡や個人蔵の断簡にまで目配せされており、稿者が複製刊行された手鑑・古筆資料集を中心に摘出したものの中には含まれない断簡も少なからずあることをお断りしておく。

（8）なお、以下の翻刻については、本誌の体裁上、行詰が断簡の書式通りではない箇所が生じている。図版を参照されたい。

（3）鶴田大氏・日比野『歌びと達の競演』（平成二十六年九月 青簡舎）

（9）田中登氏『古筆の楽しみ』平成二十七年二月 武蔵野書院）

（4）名葉集類の記述掲出は、古筆切秘書・古筆切目安は伊井春樹氏ほか『新版古筆名葉集』（昭和六十三年十月 和泉書院）、古筆切名物は武田則夫「翻刻「古筆切名物」」

（10）「■」は「と」らしき文字を墨消しているように見える。  
（11）卷十八・卷十九・卷二十の断簡が報告されているが、（3）の解説では「現在のところ確認されているのは、第十八卷恋三と第十九卷雑上の断簡ばかりのようである。」としてしまった。訂正させていただきたい。

（5）久曾神登氏「千五百番歌合の原本について」（愛知大学文学論叢）26 昭和三十九年二月）↓『仮名古筆の内容的研究』（昭和五十五年二月 ひたく書房）。その後、「本能

（12）藤井隆氏・田中登氏『国文学古筆切入門』（昭和六十年二月 和泉書院）。なお、この解説中に「茶道資料館の昭和

五十八年秋季特別展にも一枚出品されている「真蹟の短冊、消息類と比較して天皇の真蹟と考えられる」との指摘がある。

(13) 『古筆手鑑大成13 手鑑(石川県美術館蔵)』(平成五年九月 角川書店)。解説は久保木哲夫氏。

(14) この伝慈円筆「烏丸切」は『中世歌合伝本書目』(中世歌合研究会編 平成三年 明治書院)の千五百番歌合の項に「烏丸切 写 伝慈鎮筆、一三三番〜一三四番左上句、(書画美術品)展観入札売立会(昭三二・一・二七東京美術倶楽部)による 松本楓湖所持」とされるものであろう。一般に「烏丸切」と称する古筆切には、伝藤原定頼筆後撰集切がある。慈円を伝称筆者とする類似した名称の古筆切に「烏丸殿切」があり、これは貫之集を書写内容とする四半切をいう。千五百番歌合を書写内容とする古筆切で烏丸切と称するものには囑目していない。現物はおろか掲出目録さえ実見できていないが、伝称筆者及び残存箇所の間接から、伝慈円筆六半切千五百番歌合切(高城氏のいう「非本能寺切」)を、伝慈円筆貫之集「烏丸殿切」と混同したものであろうか。定かではない。

空のく鳥さへくはゆん野を  
草のりるもあそゆあきは  
何のわらふもさるるさる  
あまのちりまはもほもほん  
いななななななななな  
— じまはまはまはまはま  
よあはあはあはあはあは

らいそりるがよはらぬ  
 右歌ふらわゆくがまのよひは  
 休法を学て言のまをきりてそりる  
 ころの老羊舞も昔周武隆文と將  
 春荒るや言なれはたまそそ  
 三百廿四書  
 石 具行  
 ありまをそらふらゆき  
 しのし物なもあそる  
 古 非ぬ  
 わまのれすけちるも  
 ともやそり力はまの月

乃もたのりしれあはる所もあはる  
 三つて古今並に其力をまきしはつて  
 傳もあはる所もあはるもあはるてあ  
 ふふをまきしはつてあはるもあはる  
 傳いしつてあはるもあはるもあはる  
 せんふの中しをほくもあはるもあはる  
 心持しつてあはるもあはるもあはる  
 野道に新 ねふあつてつ紙上の御が  
 れんごの長屋より筆よりつてあはる  
 くるくく右きいなるからあはるもあはる  
 あつてあはるもあはるもあはるもあはる  
 心持しつてあはるもあはるもあはる

志ふふふふふふふふふふふ  
右 三  
りたるやまの志らぬあもしんか  
雲いつくもあたまろ〜れ  
とあつあつふりあやまひけ算がれ

やみかぶらふもの風を身に先て  
月小うなまふうはる山と云  
右 因次  
たはらうらつてもうきむしりひよの  
何とて我をほれゆくをわらうれ



かこむ世も

右

左

月をよめるあつ月満のとき月れとてとくあまの社の音も

右

左

左身よりの歌とてやあつ光たてし山のまゝ

仰りしをぬきとてあまのつとてとくあまのつと

はもまゝとてあまのつとてあまのつとてあまのつと

心のかたけとてあまのつとてあまのつとてあまのつと

心のかたけとてあまのつとてあまのつとてあまのつと

E 伝後小松院筆 四半切①(表)

ありあきとほさよあふたつもてはたはたかき  
 十五番  
 た  
 君の世はまじしむらもてはたはたかき  
 君の世はまじしむらもてはたはたかき

E 伝後小松院筆 四半切①(裏)

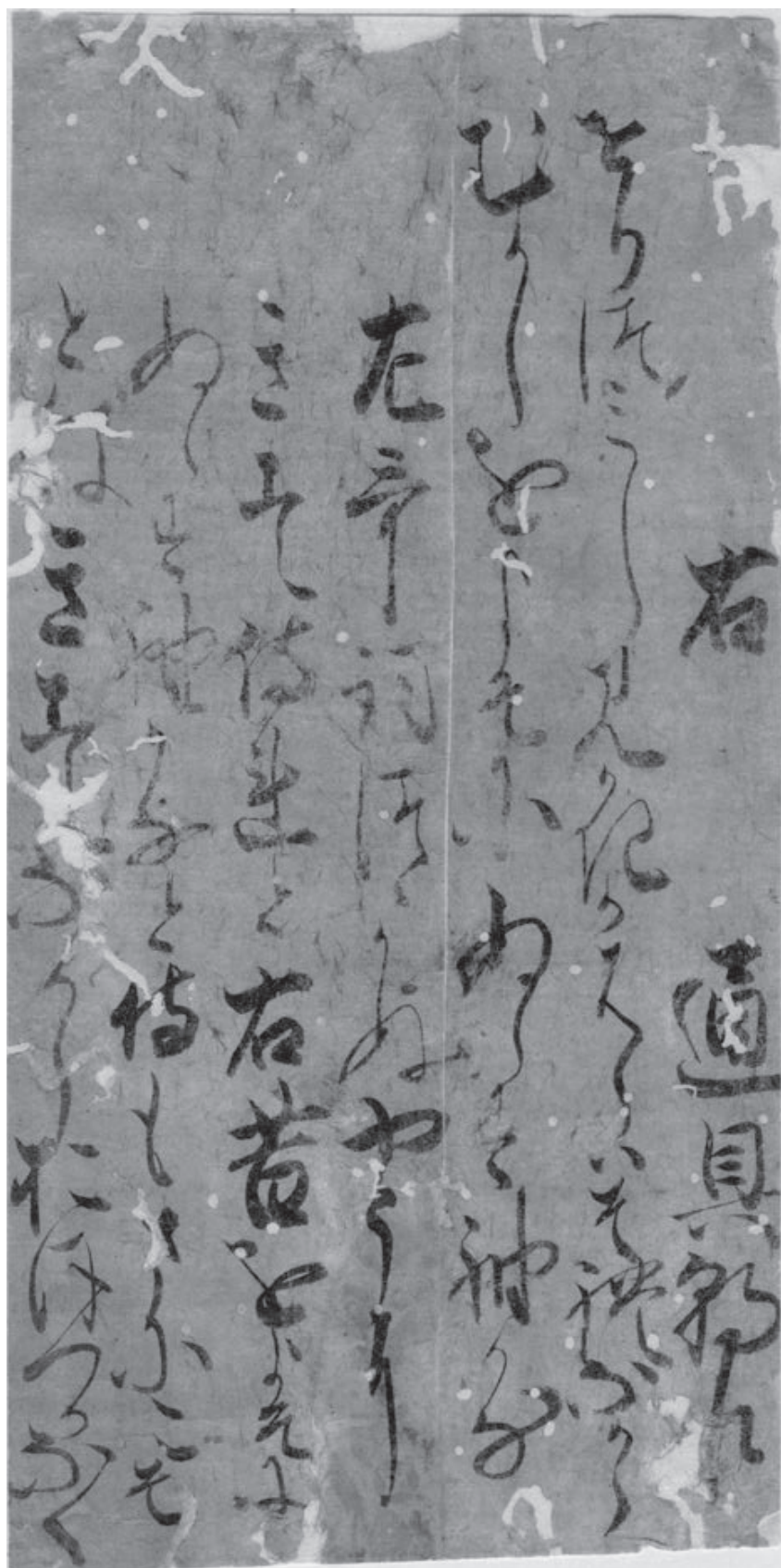
ありあきとほさよあふたつもてはたはたかき  
 十五番  
 君の世はまじしむらもてはたはたかき  
 君の世はまじしむらもてはたはたかき

E 伝後小松院筆 四半切②(表)

たの束句をよみほめてはたやうと波をいへりきと依  
 海の中をいへりきと依り祝乃ふのときふは鳥の聲  
 十七九句  
 具  
 成りたるりきやよむるもきい後めさ町のつるのりきと依

E 伝後小松院筆 四半切②(裏)

たの詞うきあしそあかつてなれと昔天照天孫の  
 山のももさかぬかしてはらふもてあとももてあみささうけて  
 祢衣はしほるんくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 事してはらふまたたつねの侍情なりきたる右膝よりあはれ



千五百廿六番

九

女房

いづれも物にちかき世にふくむかむ神のつとめ

右

拜進

いづれも物にちかき世にふくむかむ神のつとめ

て歌に可葉集の白くもいづれも物にちかき世にふくむかむ神のつとめ

いづれも物にちかき世にふくむかむ神のつとめ

いづれも物にちかき世にふくむかむ神のつとめ

三つ三つとせよとて月をいふは月をいふは

七百二十四番

右

石継卿

浪乃方たは浦ありは波中ひらりとくそそ月を

右 膳

後成卿女

月との伏見の里村の言は風をそそふ人

松乃る月をいふとてやめ相分るひをいふ

七百二十五番

左 膳

石継卿

千百五十九番由尤  
 六経の  
 にはまなまの依りて  
 ちかやまの  
 小まなまの依りて  
 神のあまの  
 色小まなまの神  
 赤の  
 まなまの依りて  
 花のあまの  
 尤つまの依りて  
 知らやまの  
 雪のあまの

神をみます別名は清めと奉りたる也  
と云

心より祈り候ふべし  
と云

子二百六十三番

た 物 良平

いふは祈り候ふべし  
と云

右 推經



K 筆者未詳 医書紙背 四半切 (表・千五百番歌合)

千二百十七番  
 左 美作  
 本より身がうせいのうをえりてしきりまのい  
 右 丹後  
 けりてのうきとまききり物早し神いやとも月片

K 筆者未詳 医書紙背 四半切 (裏・医書)

一 瓜ノうはぶらやじり茶ヲ がいぬる根 天南  
 瓜ノうはぶらやじり茶ヲ がいぬる根 天南  
 又いんちちのうきとまききり物早し神いやとも月片  
 用一又半うはぶら茶又物早し神いやとも月片